

せたかむい

発行 古平町史編纂室
文化会館8422590
第179号・16・8・1

年表で読む

古平の歴史

《85》

アワビ漁

■重要な食物

アワビは、昔は海岸近くであれば簡単に採取することができたであろうし、おいしくて調理も簡単、干したものは長く貯蔵もでき、大昔から食用として大事な海産物であったことは、貝塚などの遺跡からも知ることができる。

■明治以前のアワビ漁

アワビは串貝に製造し、当時の清国(中国)との重要な交易品であり、長崎俵物(たわもの)として販売が厳重に管理された輸出品であった。

貞亨(じやうきやう)年間の一六八六

年頃、次のよう記録がある。

蝦夷商売聞き書き

「古平は新井田与左衛門の預かっている場所である。ここから産出する物として鯨製品、数の子が多く、串貝は古平貝とも言われている。鮫油、鰯、ホッケ、カスベの干魚などもあり、荷積み高は千二百石にもなる。また運上金は三か年で三百両だが、これは知行主(新井田与左衛門)へ払われる。秋鮭の塩引き(塩蔵)三百石が船で運ばれて来た。運上金二百両は志摩守(松前藩主)へ差し出す。古平は上々の港である。」

とあり、古平産のアワビの串貝は名産品で、古平貝として当時のブランド品であったと考えら

れる。

■アワビの採取と禁漁

しかし乱獲だったのか、その後、明治になると急激に生産が減少したことから採取期間を短縮して増殖を図った。

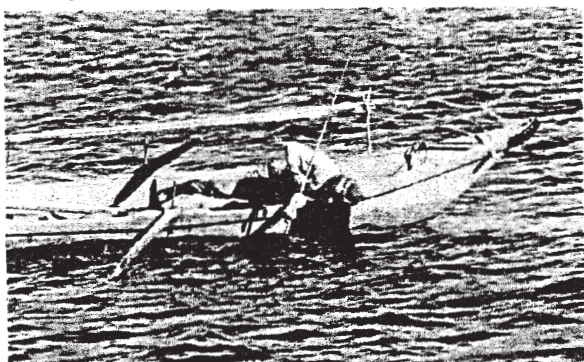
明治四年 六月～二月

大正三年 九月～二月

同 一三年 翌二月～二月

また明治四三年には、アワビ保護のため禁漁区を設け、貝の寸法によって採取を制限した。

この頃はまだ干しアワビを製造していた、小樽港へ積み出していた。



↑写真は昭和40年代の撮影だが、アワビ漁の様子は今も昔も変わらないようである

昭和三年 昭和五年

数量 一二〇石 四八〇石

金額 一二百 六七二両

アワビの収穫についてははっきりした記録が無いが、残されているものを見ると、大正元年と同三年に一人乗りの磯舟一〇隻が出漁して、九月と二月にそれぞれ一五〇貫(五六三石)、同三年にも、月は不明だが同量の収穫をあげている。

この頃になるとヤスで突くのではなく、鉤で引っかけてとり、すでにガラス箱を利用していた。ガラス箱は明治一五年頃に発明されたものだとい、波のあるときには油をまいて波を静めたともいう。

ある江戸時代の旅行記に、「……シャコタンの日司辺りではフグを煮て油を採り、その油を海にまいて波を静めるのだという。また辺りには、油を取ったあとのフグの骨が山のように積んであった。」

という記述がある。

アワビは食財としても美味であり、また、磯近くで容易に誰でも採ることができたため常に

乱獲にさらされ、毎年その収穫量は減少していった。

大正一四年、古平漁業組合は北海道水産試験場の指導のもとにアワビの生態を調査し、明治四三年から設けた丸山岬の禁漁区を、さらに永年禁漁区に設定して増殖に力を入れた。

大正一五年、古平漁業組合はアワビの採取時期を次のように変更した。

一〇月一日〜翌年一月三十一日までを、九月一六日〜二月二八日までとし、採取期間は延長されたが、アワビの禁漁期間や禁漁区の取り締まりをより厳重にすることにした。

■アワビは縁起物

アワビは昔から珍重され、神や祖先をまつる祭祀(き)に供えられたり、干したアワビを伸して熨斗(のし)として使った。

アワビは漢字では鮑・鮑・鮑などと書くが、のしの熨斗という漢字は、熱で布地を伸ばす

火熨斗(ひのし)の熨斗(アイロ)からきた当て字である。

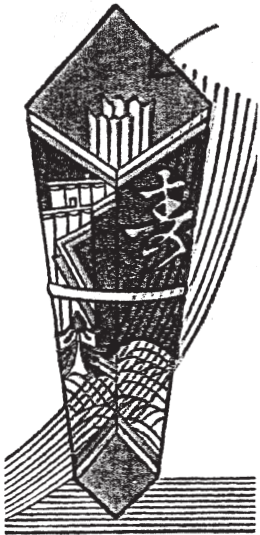
祭祀に使われるのはのしアワビである。干して固くなったアワビを、機械も無いのにどうして伸ばすのかと考えこんでしまいが、のしアワビの製法は生のアワビを小刀で薄くむき、それが生乾きのときに引きのばし、また干してから引きのばして作るのだという。本州でとれるアワビは大きいので、長さが一メートルにもなるという。

そのほかに打ちアワビというのがあるが、これは乾燥したものを叩いて引きのばしたものである。

のしアワビは、『延長悠久』

武運に恵まれ、戦場での無事を願うとして古くは武士の出陣の祝いや無事に戻った時に出

印刷された熨斗(のし)のしアワビは、ここにチョッピリ黄色い顔を出している。



されたが、単に祝いの席の飾りものではなく、供応としての食料でもあった。

後には婚礼の引き出物や、贈り物ののしとして使われ、その習慣が現在まで続いている。現在ののしは印刷されたもので、本来ののしアワビは形を変えてちよっぴり顔を出している。

■アワビの種類と利用

アワビは日本全国で採取されているが次の四種類がある。マダカ・メガイ・クロアワビ・エゾアワビで、大きくて見栄えのするトコブシは、厳密にはこの四種類とは違う。

大きさや生息している地域、

海の深さなどもそれぞれ違うが、北海道の磯に生息しているのは名前からわかるようにエゾアワビで、食材として最高の品質を誇っている。

アワビは食品として高級品だが、昔は貝殻も美術工芸品である螺鈿(でん)に最も適した(えだも)に使われ珍重された。

■余談ですが……

古平にも記念碑の建っている、詩人としての名声の高い吉

田一穂の大好物が、アワビのみそ汁であったという。アワビは今が高嶺の花の貴重な食品だが、少なくとも戦前の頃だと、一般の家でもアワビを食べる機会があったし、当然禁漁ではあったが、子供達にとっては海に潜つての格好のおやつ代わりだった。小学生の弁当のおかずにもよく持つて来るのがいた。

アワビの一番うまい食べ方は、浜の人だと生を海水で洗って丸かじりだと言うだろうナ。しかし、ものの本によれば、生のアワビをおろしがねでおろし、とろろのようにして食べる料理もあるという。

あんまり面白い食べ方なのでぜひ試してみたいが、果たしてうまくおろせるものだろうか？ が……興味はある。

ところで、アワビは食べてみてもおすのほううまくて、養殖のものより、当然だと思いが天然もののほうがうまいという。

♂(オ)・♀(メ)と、天然ものと養殖ものとはどうして見分けるのだろうか——そんなこと全然気にしないヨ。

大正一二年

まず始めに、日記の原文を直接読んで見てください。当時の感触がより伝わってくる思いがします。(日記は次ページ)

— 日記原文 —

三月十六日

快晴 寒暖 四十(度)

珍しい快晴天気、今日は大安とか云ふて吉日なりとて、網卸し祝ひやる家沢山だ。悦三浜へおんふして行く。○、父等八大漁旗等を立てて景気よい。一日増し二鰾場気分になった。午後一時頃、突然人が走るやら騒々しいので戸外へ出て見たら、沢江方面二煙が上るが、居る。間もなく半鐘もなり出した。それ火事と皆々走る。予もクツハキ出掛けた。歌棄崎長雑倉から出て盛んにもいて居る、大さわ

き。間もなく消防組も集まり必死活動する。キ雑倉と崎長ハナレハ随分危険で阿ったか、遽に浦幸ひ風ハなく消防ポンプノ御蔭で消防火シ、他二延焼せなんだハ幸ひで阿った。キ崎長でハ家財道具全部出し大サワギ、損害四、五千円ハ阿ろし。原因ハス

トープエン筒らしい。夜、信用組合二火防組合役員集会阿る。役員効蹟(功績?)者二表彰の件ト、制帽注文二付相談アリ、十時散会した。

(欄外) 今夜初めて④、全、建網投網した。

▼三月一七日

今夜初めて④、全、⑤で建網を投網した。天気快晴。この頃は寒さもゆるみ、凌ぎやすくなつて

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【80】

きた。雪もだんだん消える。しかし、本年の雪はずいぶんと多かった。店は麻ロープかアバ縄ぐ

らいのもので閑散としている。熊さんは農園の雪よけに行く。午後一時、久し振りに銀行へ行く。浜方は大抵準備が出来た

ようだ。刺網も網をからげたり、ナツ石をついたりして準備も出来、あとは鰾の来遊を待つばかりだ。小屋掛け、ナヤこしらえなどで賑やかだ。帰途、③に寄る。

重久さん札幌一中の受験に行つた様子を聞く。明年はいよいよわが家でも幸治が受験だ。夜食を馳走され七時に帰る。

▼三月一八日

起床七時半。日曜日で子供等は家にいるので賑やかなこと。浜は一日増しに活気づく。春光

うららかにして、気も晴れ晴れするようだ。町の中の雪も大分解けた。困の店や郵便局も雪で見えなかったが、二、三日前か

らの暖かさで解け、道路も広々としてきた。

▼三月一九日

起床八時。この頃は日も長くなり、気候ものどかな春らしくなった。店はアバ縄やら麻がボツボツ売れていくぐらいいよいよ鰾漁の戦鬭準備も出来たようだ。八分ロープも売れる。彼岸の入りで、家でも妻はコノさんとボタ餅作りをしている。午前

る。原田さん、④さん等と連れ立って二条通り、三条通りを廻る。ずいぶんと危険なところもあったので、注意しながら廻る。久し振りにあちこち歩きいい運動になった。彼岸のボタ餅をおいしくいただく。

▼三月二〇日

彼岸になったら気候もずいぶんと春らしく、好天が続く。大雪も、このところの天気でほとんど消えていく。店ではボイル油ロープ、アバ縄などが売れ行きが良い。熊さんは午後から農園行き。私は店番、リングも三円程売れる。夜、久し振りで大鶴間へ遊びに行く。電気会社の工夫もいて、いろいろ電気についての話を聞くこともできた。

▼三月二一日

起床七時、鰾は刺網あちこちで、二尾揚がったとのこと。熊さんと鎌田さんは農園でリングの枝切り等する。父も久し振りに農園へ行く。冬中は寒い寒いと家にはかり居ることが多かったが、この春景色で元気づく。午前中に帰ると言っていたのに、熊さんに弁当を取りに来させた。妻は午後から傘のよしさを

三 月 十 六 日

金 子

歲記

昨、此晴天氣、
 海、如、
 一、
 戸、
 系、
 城、
 と、
 海、
 大、
 二、
 本、
 公、

(大正一〇) 英露通商條約成立 (明治三八) 露國佔領 (文治三) 藤田東鵬生

70

▼三月三日

起床七時。昨夜は静かな夜で

湯屋へ行ったが、明日は卒業式だというので満員だった。

▼三月三日

枝切りに行く。関口さんからリンゴ五〇〇斤買い、昼にそのうちの三〇〇斤を持って来る。本年のリンゴの売れ行きは全く予想外だった。父は彼岸の中日なので寺参りに行く。店は小口売りがボツボツあり忙しい。夕方

起床七時。学校の卒業式がある。行く。一〇時に式が始まる。本年は二九回卒業式とのこと。私は六回だから、もう二〇年余り経ったことになる。高等二年の卒業生は一一〇余名、ずいぶん多くなった。在校生の祝辞は西館

君、卒業生の答辭は長尾貞二郎君であつた。長尾君は口頭で答辭を述べたが新しいやり方だ。文治、幸治、トシの三人は優等賞と皆勤賞を貰つた。幸治は五年生の總代で修業証書を受けた。修業証書は、今までのものの四分の一くらいで小形になつた。式の後、二階作法室で、受賞者を集めて副賞の品物が渡されたが、これは今年から新しく始まつたことである。一時に帰る。

▼三月二四日

初鯨が獲れた。今朝崎長△
群来村種金、斉藤などで、多い
ところは磯舟三杯、下で一杯
くらい獲れたとのこと。刺網は
二〇〇三〇尾くらい。町内では
まだ一部しか初鯨を味わってい
ないだろう。私の家では、刺網に
掛からないと初鯨は味わえぬ。
店は暇なので、しばらく休んで
いた手習いをする。夕方、悦三を
おんぶして浜に出て見ると、建
網のほか、刺網も沢山出ていて
賑やかだ。ゴメが沢山飛んでい
て悦三も大喜びだ。トシは一枝
さんへ、優等賞を貰ったことを
知らせると言つて手紙を書いて
いる。一年生を終えたばかりな

のでかな書きだが、見るとかなり書けるようだ。

▼三月二五日

いよいよのどかな春景色となった。洗面して早々浜へ出て見た。前浜から沖村方面にかけては一向に模様がない。群来村方面では熊木四杯、種金一、二杯刺網も二、三本宛て獲れたとのことだ。外は無い。新聞を見れば、昨日の漁は美国合計二〇〇石、古平五〇石、外は獲れぬとのこと。例年、余市、岩内が鯨の先がけだが、古平はさらに振るわぬ。これからは古平、美国、積丹だけで、岩内、寿都方面は鯨もさびしくなっていくようだ。熊さんと鎌田さんは枝切りに、私は店番だ。リングも今日から一斤六銭に値上げしたが、ポツポツ売れていく。正午頃、悦三を連れて浜に出て見る。子供等が大勢浜で遊んでいる。広々としておもしろいのか、悦三は帰らぬと言ふ。三時頃、久し振りで農園まで行く。まだ雪は四尺以上もある。初鯨が獲れるというのに、こんな大雪の年もない。二人とも雪よけ、枝切りに一生懸命だ。枝もずいぶん折れていてなかなか

の大仕事だ。畑奥の川原にカモメのいること、何千羽と数知れぬ程だ。季節によつてよく集まつて来るものだ。五時頃帰る。夜八時頃、④前浜で初鯨が獲れ、まだ生きているのを二尾貰った。本年の初鯨、まず神棚へ上げた。越中屋からも初鯨を貰い、夜食の馳走、本年の初物だ。

▼三月二六日

五時頃からモツコしよい連中がガヤガヤ通る。昨夜の模様が良かったので、今朝は大漁ならんと畑通りから来るのだ。起きて浜へ出て見る。湾内から沖村にかけて、建網が合計で三〇杯くらい、刺網が二、三本から、少ないところでも一本、合計五〇〇石の漁だ。④では両漁場で五、六杯も獲ったとのこと。くん製にするというので、大きなコガに入れて塩蔵している。この日は、初鯨が古平全般に行き渡った。家でも刺網やその他一五、六軒から貰う。二もつこある。背割りを沢山こしらえた。午後二時頃、新地の銀行へ行く。ガソリンポンプ車の試運転をしているのを見る。放水もずいぶん勢いよく出る。これまで機械の

手入れが充分でなく故障がちだったので、余市から技術者が二人来て修理したのだという。丸山町方面の貸し方のところを廻る。力三郎のところに寄つていろいろ話をする。今年はタラ漁に三〇隻程出たが、昨年程の漁はないと言ふ。帰り傘、刃に寄る。重久さん、札幌二中合格の知らせがあったと喜んでゐる。夜食をよばれ、一時帰る。今日の漁は古平、美国、積丹だけで、その他は無し。

▼三月二七日

起床七時。今日は鯨漁は全く無い。天気は珍しい上天気で寒暖計は五〇度F(約一〇度C)まで昇る。一枚脱いでも寒くない。今までどこに隠れていたのか、影も見えなかった蠅が飛んでいる。いよいよ凌ぎやすい気候になった。今日は農園を休んで、背割りを裏に干すやら雪消しなどやる。小樽岡崎行きのリングゴ二箱荷造りする。今日の新聞によれば、古平は今までに五〇〇石、余市一〇〇石、美国一千石、積丹四〇〇石とのこと。外は話にならぬ程度だ。例年大騒ぎする岩内、余市は、美国、古平に負けた

ようだ。夜に入り雨がシヨボシヨボ降り出した。雪の消えること、暖かいこと、コタツはもういらぬようだ。佐渡へ久し振りに手紙を書く。

▼三月二八日

昨夜来の雨で、今朝起きて見れば雪はずいぶん消えた。道路はデコボコで悪いが、この頃は皆靴だから足袋などはぬらさぬ。朝方、歌棄山中、沖村方面で漁があり、父、八反田、②、④、共同が一〇杯、久米田、上田三杯、その他二、三杯獲ったとのこと。刺網は沢江方面少々、岩内、古平方面は更に無い。余市も景気が無い。積丹、美国が良い。小樽新聞に小樽商業の合格者が出ている。古平から三人が合格し、須貝清一が成績抜群で一番で合格したとのこと。珍しいことで、本人はもちろん古平の学校にとつても名誉だ。家では今日すし鯨を漬けた。先日、葉書で佐渡物産へ並アバ縄の値段を問い合わせたら、返電があった。一円七〇銭とのこと。ずいぶん高い。如何したらよきや。都合によつたら佐渡へ行つて見ようかとも思う。

教科書のいまむかし

先日、高橋健一さんから「尋常小学国語読本巻一」と「尋常小学修身書巻一」二冊の寄贈を受けました。戦前の小学校から女学校・中学校などの教科書が二十冊余り集まりました。

たまたま今年は小学校教科書の採択の年でもあり、六月中旬から七月初旬までの二〇日間、文化会館で展示会が開かれていました。

教科書はその時代と生活、思想などを顕著に反映するものです。現在の新しい教科書なども見ながら、教科書についてその歴史の周辺を眺めてみたいと思います。

◇教科書とは

学校といえは教科書がつきものですが、教科書とはいったい何でしょう。

「教育のために使用される主な教材を先生が教えたり、また、

生徒が学習するのに便利なように作られた図書」とでも言うるでしょう。

そしてこれらは、国が決めた学習指導上のきまりに従って作られています。国によって教科書制度や内容はそれぞれ違っています。日本は欧米諸国に比べて、教科書に対する制約が少し厳しいのではないかと、とも言われています。

◇学問好きな日本人

安政元年（一八五四）今からちょうど百五十年前になりましたが、東京湾にペリー艦隊が来航して日本を驚かせました。その時の報告書から最近わかったことがあります。

それには、

「……日本は大変教育が行き届いていて、日本人の識字力読み書きや計算力は世界でも高いものを持っている。将来、恐るべき国である。……」

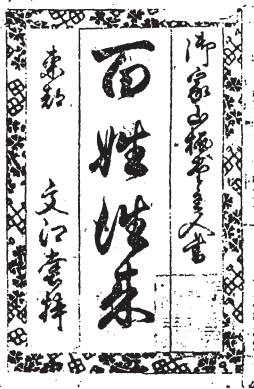
という内容のことが書かれていて、日本を東洋の野蛮国ぐらいにしか考えていなかったペリー提督を驚かせた、ということです。

◇寺子屋の教育

江戸時代は二六〇年余りですが、その間、ほとんど戦争というものがなく、とにかく一応は平穏無事な時代でした。それで『武道より学問』ということとで学問が奨励され、武士の子供が対象でしたが、江戸はもちろん、それぞれの藩には藩校という学校も出来ました。

一方、庶民は寺子屋や私塾などに通って、「読み・書き・そろばん」という実用に役立つものを学んでいたわけです。

当時は学校にしろ、寺子屋な



→『百姓往来』農作業の手引き

←『商売往来』の内容



どにしても、教科書に類したものが使われていました。それらは道徳上の教えや、仏教の教え、優れた歴史書、文学書などが主なものでした。

寺子屋では先生の書いた文字を手本にして習字、読みや意味は分らなくても、先生の読んだ通りに声を出して読む素読（そどく）などが中心でしたが、やがて実用的な内容をまとめた本も作られるようになりました。これらは現在の教科書と言つていいでしょう。

多くは往来物（おうらいもの）といわれるもので、手紙の手本や、実生活に必要な事柄を二、三か月に分けて、それを手紙の形式で書いてあります。△続く▽

歌碑移転の日

大 澤 文 子

「さアて——きょうは……」
 大事な北見恂吉先生の歌碑移転
 祝賀会の日だ。いち早く会場
 に着いていなければ……仕事
 がある。

気もそぞろ、早々に必要書類
 を揃え、七時五分即予約のタク
 シーに乗り込む。しばらくぶり
 の余市行きだ。日曜日なのに列
 車は混雑おびたらしい。

身を細くしてやつと座席を獲
 得、小樽駅で俱知安行きに乗り
 換え、うとうとしているうちに
 「ヨイチーヨイチー」駅員の
 声にあわてて飛び降りる。

何年か前まで、海鳴誌の編集
 に通っていた余市だ。やや薄暗
 い余市駅ホームなので、足元
 気をつけながら階段を降りる。

昨日と変わりほどよい好天気
 に恵まれホッとす。余裕をも
 って集合場所に行かなければ……
 ……時間を見計らい駅前に待機
 していたタクシーに乗り込む。

運転手さんが古平出ときき話
 がはずむ相良さん。秋田谷さん
 とときき耳をたてながら笑い合っ

ているうちに、はや集合場所の
 『円山公園ふれあい交流施設
 所』に到着。

会場には賑わしく挨拶を交わ
 す歌びと達の姿。受け付には大
 会のすべてを受けもつ大役の中
 村さん、轟木さん、菅原さんの
 顔、顔！ なつかしい。轟木さ
 んがつと側へ寄られ、大きな赤
 い花の徽章を胸につけてくださ
 る。予期しないことだったので
 「ええ？」とおどろく。

久々なれば、私も歌びと達と挨
 拶を交わす。
 しばらくぶりの岬会員、池田
 さん、鈴木さん、丹後さん、寺
 田さん、東さんらが見えホッと
 する。

大きなカメラを抱えた本間良
 子さんにもこやかに迎えて下さ
 る。やがて開会の時刻も迫り、
 一同、延々と続く坂道を足早に
 歩き、ようやく円山公園の会場
 へたどり着く。

左辺には松の大木、右辺には
 高く聳える桜の大木、台座も新
 しく、平成一六年七月一八日の

きょう、先生の歌碑は堂々とこ
 の地に移転されたのだ。久々に
 見上げる北見恂吉先生の歌碑。
 「おーきたかアー よくきたな
 アー」

年前の大先輩、横谷氏、川上
 氏、山本氏、高岡氏、中村勝美
 氏の方々が北見先生の功績をた
 たえられて、昭和四十一年五月
 十五日、茂入れ中腹の山荘の庭
 に歌碑を建立され、祝賀会をも
 たれたことを囁々と話した。

息をしずめ、丘上より遠く見
 渡せば蒼々と静もる日本海の
 美しさ。はるか眼下には先生の
 通つていらしたといわれる沢町
 小学校。また伊藤整氏と常に
 親しく交流をもたれたというシ
 リバ岬、はるか眺め感慨無量。

続いて中村千恵さんの朗詠、
 北見先生の
 『歌誌あみて寝に入ることのば
 りたる……』

やがて北見先生のご遺族、鈴木
 重規氏、土井久子様、久々津典
 子様方がご来場。

ご遺族の方々の拝礼が続き、
 司会者の指名される順に全員が
 拝礼。ご遺族の鈴木氏に栄花豊
 氏より花束贈呈。鈴木氏よりご
 挨拶があり、のち記念撮影で式
 典は終了。尽きぬ思いの名残で
 はあつたが、この地に堂々と移
 転された先生の歌碑に「またの
 日」を約し、坂道を下り会食の
 席場に向かった。

また喜茂別よりはるばる来町
 された栄花豊氏、余市の川村明
 氏、永井親夫氏、加藤正明氏、
 余市歌会の皆様方ご列席のもと
 式典は開始された。

山岸千嘉子さんの司会進行
 のもと、厳かに序幕の儀は終わ
 り、御影石に刻まれた北見先生
 の三首の歌は夏の陽に光り、
 会場には一瞬溜め息がもれた。

司会者のすすめにより、会長
 川村明氏の挨拶、
 北見先生の『短歌の歩み』を語
 られ、一同感動するのみ。

次いで指名された私は、四十
 年間の大先輩、横谷氏、川上
 氏、山本氏、高岡氏、中村勝美
 氏の方々が北見先生の功績をた
 たえられて、昭和四十一年五月
 十五日、茂入れ中腹の山荘の庭
 に歌碑を建立され、祝賀会をも
 たれたことを囁々と話した。

息をしずめ、丘上より遠く見
 渡せば蒼々と静もる日本海の
 美しさ。はるか眼下には先生の
 通つていらしたといわれる沢町
 小学校。また伊藤整氏と常に
 親しく交流をもたれたというシ
 リバ岬、はるか眺め感慨無量。

やがて北見先生のご遺族、鈴木
 重規氏、土井久子様、久々津典
 子様方がご来場。
 ご遺族の方々の拝礼が続き、
 司会者の指名される順に全員が
 拝礼。ご遺族の鈴木氏に栄花豊
 氏より花束贈呈。鈴木氏よりご
 挨拶があり、のち記念撮影で式
 典は終了。尽きぬ思いの名残で
 はあつたが、この地に堂々と移
 転された先生の歌碑に「またの
 日」を約し、坂道を下り会食の
 席場に向かった。

山岸千嘉子さんの司会進行
 のもと、厳かに序幕の儀は終わ
 り、御影石に刻まれた北見先生
 の三首の歌は夏の陽に光り、
 会場には一瞬溜め息がもれた。

司会者のすすめにより、会長
 川村明氏の挨拶、
 北見先生の『短歌の歩み』を語
 られ、一同感動するのみ。

次いで指名された私は、四十

年間の大先輩、横谷氏、川上
 氏、山本氏、高岡氏、中村勝美
 氏の方々が北見先生の功績をた
 たえられて、昭和四十一年五月
 十五日、茂入れ中腹の山荘の庭
 に歌碑を建立され、祝賀会をも
 たれたことを囁々と話した。

「この新聞紙上では、全国的に論議の盛んな市町村合併の問題が取り上げられるようになり、合併問題で協議を重ねてきた古平町民にとっても無関心ではいられません。」

この町村合併という問題は今に始まったことではなく、古くは明治の大合併があり、近いところでは昭和の大合併がありました。

明治二年からの合併は、戸数三〇〇〇五〇〇戸を標準として行われ、全国で七一、三四あった町村が、合併や編入などで、一五、八二〇町村と約五分の一になってしまいました。

記憶にも新しい昭和二八年からの昭和の大合併では、人口八、〇〇〇人以上の町村を目標にし、九、八六八市町村が昭和三六年には三、四七二市町村と約三分の一にまで減少し、明治二二年の頃の二〇〇分の一にまで減少したわけです。

しかしこの間にも、町村からの分離独立や、その後また合併したという経緯をもつ町村も

あり、時代の流れというものを感ぜさせます。

二二では、市町村制度の基盤である行政が、明治からこのように行われてきたのか、どのように変わってきたのか、北海道から後志、そして古平での、それらにかかわる生活の変わり方を見てみたいと思います。

戦後になっても北海道に住

蝦夷地から北海道へ—— 地方自治の移り変わり

む人の中には、また本州を内地と呼んでいる人がいました。北海道は本州とは別な国？と思われていたわけで、確かに北海道と本州は戦後まで、町村の仕組みにも差別が残っていました。

何回になるのかその予定はありませんが、時代と共に、生活にかかわりの深い地方の制

蝦夷地の地図

(禄三年・一七〇〇)



蝦夷地に和人が住む

今から一〇五〇年ほど前

物語などでは八幡太郎という名前がよく知られている源義家が、奥羽地方に勢力をもつていて、朝廷に反抗したという安倍氏を打ち滅ぼしました。

この戦についてはNHK大河ドラマの中にもありましたが、その安倍一族の子孫といわれる安東氏が、津軽半島の北の端になお勢力をもっていました。

そこから洋上はるかに眺めると、最も近いところでは直線距離にして二〇キロとは離れていない、それは古平から対岸の増毛辺りを眺めるのより近い距離で、

度はどう変わったのか、組織はどうであったのか、身近な話題をとらえて順に紹介していく予定です。

まずは明治の前、和人(本州に住んでいた人)が蝦夷地に渡って来て商業活動が盛んになった、松前藩の時代から始めたといっています。

当時はまだナゾの島であつた蝦夷が島が見えていました。

彼らは、それほど大きいとは思われない船に乗つて荒海海峡を渡り、アイヌの人達と交易(物々交換)をして、それで利益を得ていたと思われます。

当時は蝦夷が島とも呼ばれていたという北海道は、京都辺りからの盗賊の流刑地としてわずかに知られている程度で、それも野蛮国というイメージでした。

しかし一方ではこのようにして、津軽半島北部と北海道南部とは古い時代からの往来があつたようです。

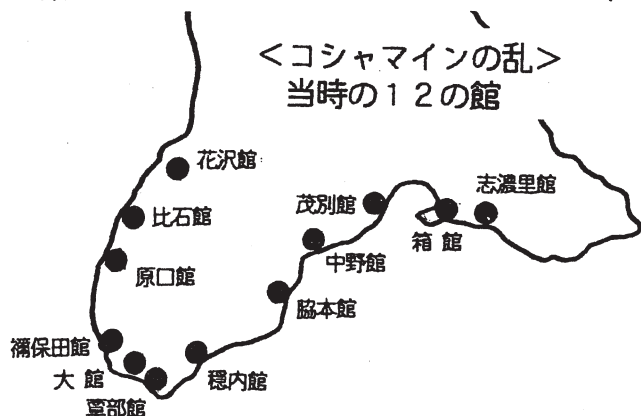
そして、義経伝説はともかくとしても、奥州・藤原氏の残党が逃れて来たことや、京都から盗賊を流刑(島流し)にしたことなどから、本州と蝦夷が島との関係は次第に深くなつていったのです。

その後、奥羽にも戦乱が続いて、戦に破れた安東氏の一族は蝦夷が島に渡り、道南の各地に一〇か所余りの館(砦)とてを築きました。家臣等をよくめて、当

時の和人の活動範囲は東は鶴川から、西は余市付近にまで広がっていたといひます。

先の藤原氏の残党は、すでに余市にまで逃れて来ていたといわれ、それなら古平周辺にまでも来たのではないかと、とも推測されることから、古平町史では、「一一八九年(文治五年)この頃から古平にも何人か住むようになったと考えられる」と、このように記述しています。

<コシャマインの乱> 当時の12の館



ところがここに(一四五六年)、

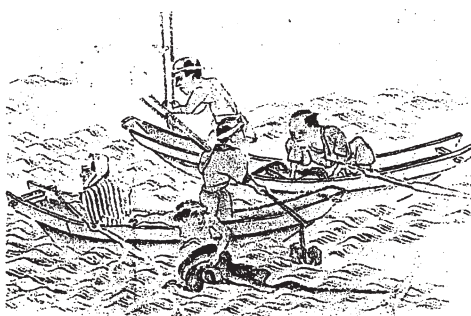
コシャマインの乱と呼ばれるアイヌとの戦が起き、多くの館は攻撃されて破れ、館主はその勢力を失つてしまいましたが、僅かに一つ残つたのが上の国の蛸崎氏の館でした。蛸崎氏はアイヌといつたんと陸しましたが、後にコシャマイン父子は殺害されてしまいました。

これによつて蛸崎氏は勢力を伸ばし、ついには蝦夷が島の和人勢力を統一して、やがて蝦夷が島全島を支配する勢力となつていきました。

その頃、国内では豊臣秀吉が天下の実権をにぎつていたので、蛸崎氏は秀吉に取り入つて直臣となり、これによつて主家であつた安東氏から独立したのです。

その後、秀吉から志摩守に任ぜられて、蝦夷が島に出入りする者は、必ず蛸崎氏から許可を受けなければならぬという一札をもらい、このことから蝦夷が島の島主として認められることになりました。志摩守とは島の守(シマのカミ)、すなわち蝦夷が島の主になつたという意味でも

←重要な産物であつたコンブ漁



あります。

やがて秀吉が亡くなると徳川家康に謁見し、同様の待遇を認められると、姓を蛸崎から松前と改め、大館のとなり福山に城を築いたのです。

米のとれない土地ですから石高はありませんが、幕府からはそのときによつて、一万石から三万石の大名としての待遇を受けていました。

そして明治維新の廃藩になるまでの約二七〇年間、一時期、短い期間でしたが幕府が直接領地とした以外は、ほかに例を見ない大名として蝦夷が島の支配者となつたのです。

戦中 中 戦

泣き笑いの
樺太漁場体験記

戦後 後 戦

吉 野 慶 一 郎

独奏に 先の第一回演奏会
猛練習 のときには、懐か

しい思い出もあつてアコード
オンを弾きましたが、荒れたよう
な指先が何ともぎこちなく、も
どかしい思いをしていました。

そして今回もいっしょに練習
をしていたところ、指導の先生
から、一曲ですが独奏を指名さ
れビックリ仰天、とても私には
荷が重過ぎます——と辞退し
たところ、

「あなた方は音楽芸術家でしょ
う。ぜひ頑張ってください」
この言葉には、ただ苦笑いをす
るしかありませんでした。

どうなるものかと不安を抱え
ながらも、「もうこうなつては
やるしかない！」と心に決め
て、先生に特訓をお願いしまし
た。

こうして、全くの初歩から改
めて勉強を始めることになった
のです。

激励を受け 先生の親切な
練習を終える 手ほどきと励

ましに支えられ、感謝しながら
懸命な練習が続きました。あ
んなにゴツゴツしていた指先も、
やわらかく動くように感じられ
、次第に練習が楽しくなつてき
ました。しかし、まだまだ自信
はなく、公演の近づくのが恐ろ
しいと思うような毎日でした。

練習を始めてから二週間程
も経った頃でしょうか。先生
から一同に、

「皆さん、思ったより早い上達
ぶりでした。もう素人ではあり
ません。自信をもつて公演に望
んでください。これからは頑張
ってください」

と、練習の終了を告げられ、一
同もほっとした思いで、明るい
笑顔で喜び合いました。

自信の 指導の先生方にお
晴れ舞台 礼を申し述べ、公
演に向けてどうやら自信も沸い
てきたような雰囲気でした。

『第二回白樺楽団コンサート』
と銘打つての公演は、晩秋の一
月三日、それは奇しくも明治
節の日でした。

会場の映画館は待ちかねた観
客で、開館と同時にたちまち超
満員の盛況ぶりとなりました。
ソ連兵の姿もはるかに前回以上
でした。

気が付くと舞台の両袖には、
誰が置いたのか今を盛りの香り
も高い菊の花が豪華に飾りつけ
られ、館内もひとときわ明るく、
日本情緒をかもし出して心に安
らぎを与えてくれると共に、郷
愁を誘うような情景でもありま
した。

故国の祝日をしのび、今日の
公演を祝福してくれた心ゆかし
い贈り主に、ただただ感謝の念
でいっぱいでした。会場はかつ
てない程の人、人、人で埋め尽

くされていました。

一切の準備も終わり、一同は
楽屋で今日の公演に漕ぎつけた
満足感と、次への緊張の面持ち
で開幕をば待っていました。

明治節に ところがその時
ソ連国歌？ になって、急に
問題が起きたのでした。

それは、開幕にソ連国歌の
演奏をきめていたのですが、開
幕寸前になって急に団員から、
「こともあろうに、明治節にソ
連国歌とは如何なものか」
という意見が出たのです。

誰しも心の底に抱いていた疑
念が、ついに口に出たのです。
急遽、話し合いをしましたがあ
とまらず、開演の時間は迫つて
きます。この時、責任者が、

「祖国を愛する心は日本人とし
て当然です。しかし、いま私た
ちが置かれている立場もよく認
識しましょう。この公演は日ソ
友好の架け橋になるよう、敬意
を表して、贈り物として開幕し
ましょう」

一同は心のわだかまりも消
え拍手。と、待っていたように
開幕のベルが鳴りました。

早春の積丹を行く 2

吉 川 義 雄

「最近、観光客が来るようになったので、今年から観光協会を作ろうということになって、ぼつぼつ始めているところですよ」と、入舸の助役さんが語り、妙に色の赤いお茶と、どうぞと、紙包みからアメ玉を一つずつみんなにすすめて下さった。入舸村を辞して、余別に向かう。

幾丈もある、切り立った崖が、海に入る直前のきわどい海岸線に、トンネルが幾つも穿たれ、道は岩盤の上に、コンクリートで舗装されている。

幾年か前の、凶漁のときに、失業救済工事として施工されたものだという。

遥かに神威岬が見える。元禄四年(一六九二)から安政三年(一八五〇)まで、実に百六十五年の間、婦女子の通行を阻んでいた岬である。

日司を過ぎるころから、断崖は幾分おだやかになる。そして、野塚の海岸は砂浜に変わる。曾て、私が従軍していたとき、台湾の南端から、東海岸を、トラック部隊で北上したことがあるが、当時と余りにもよく似た景色の再現は、私にとって、たまらなく懐かしい。

前から来た、小荷駄を背負った馬が、私達の車に驚いて、主人を置き去りにして、今来た道をトコトコ引き返して行く。棒切れを持った主人が、それを追って、慌てて駆けて行く。街では見られぬ異質な風景に、車内にこらえ切れぬ笑いが湧く。

「余別村」に着く。積丹半島の最先端の小さな村。此処から、文字通り、半島の突っ鼻にある灯台までは、猶、徒歩で四十分はかかる。遠く望見しか出来ない神威岩も、灯台の位置から

は、すぐ足下に見られる筈である。

風が強いのと、先を急ぐこともあって、そこまで行くのを今回は見合わせる。

帰路は、野塚から山に入る。

部落の右側から左側へ、白い鶏が一羽、首を思いっきり伸ばして、シャニム二車の前を横切つてスツ飛んでゆく。黒っぽい山羊が、とぼけた顔をして車を見送ってくれる。

入舸から、日司までの海岸道路の、曲折と狭さで苦労した蜷子技師は、「この道は立派だ。全くよい」と、思いっきりアクセルを踏む。

標高一二九八米の余別岳と、一二六〇米の積丹岳が、仲良く肩を並べて聳える姿を右手に眺め乍ら、高原の道をひた走る車中に居るのは心地よい。

高原の稜線を、一つひとつ越える度に、コバルトの空に、千切れ雲が美しく流れているのが印象的だ。

ドボルザックの「新世界交響曲」から、そのメロディーのどこを口ずさんでも、ここでは間髪をいれずマッチさせることが

出来るだろう。積丹高原は、そうした世界の景色でもあるようだ。

私達のジープは、早春の風と光りの中を、翼を得たように走った。(終)

☆ ☆
以上の原稿は、実に五十七年程前のものであり、今の積丹半島には、いささか程遠い表現である。

古平町史の、概略執筆を命じられ、出張の度に、道立図書館に戻られた更科先生の許にお寄りして、ご教示を受けたものだ。

積丹紀行も、そうした関係で同行を命じられたものであり、古平大火後、間もなく私も札幌に転居したのでこの原稿をどこに提出する予定だったのか、無かったのかも分かっていない。

札幌の街角で、不思議なくらい先生に「よう！ お元気？」と、何度も声をかけられた。

相当以前、新聞に、先生の訃報が出たとき、恩師を失った思いであった。この原稿の中で昔の積丹が、先生の温顔と共に蘇って来る。

武蔵加て軍道建設

〜 続 く

翌日、熊の解体をアイヌ出身の兵隊が引き受け、俗に言う熊の胃は軍医が研究のためと言つて持つて行つた。解体をした兵隊は、熊の手のひらが何よりの珍味で、

「貰つてもいいか」と言うので、「どうぞ」と言うので喜んで持つて行つた。

解体した肉は腐ると困るので四斗樽三つに塩水を作り、その中に放り込んでおいた。何しろ熊のヤツ、兵隊の残飯を毎日食べていたせい口臭みがひどく、私も焼いたらどうかと思ひ串に刺して焼いてみたが、味はするめそつくりだが、やはり臭みがあつてさっぱりうまくない。

炊事係も何とかこの臭

みを消すためにカレー汁にしてみ、大隊の全員に食べてもらったが評判はよくなかつた。

幌内川には産卵のために、物凄く数のマスがのぼつて来る。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

20

橋 義 春

それを漁業に経験のある兵隊で漁撈班を編成し、マスを大量に獲つては炊事場へ持ち込んで来る。朝、昼、晩と、マスが副食として出されたが、仕事の後はとにかく腹が減るので、けつこ

う皆はよく食べたものである。

私が非番

の時、大きくてうまさうなマスを丸ごと食べ

てみたいと思ひ、一匹まるまる串

に刺し、かまどの残り

火で焼いていたら小林

大隊長が朝の散歩にや

つて来た。

これはヤバイなと思つたが、もうすぐ傍まで来ているので隠すこともできない。しようがないので元氣よく立ち上がり、敬礼をしたら、

「その魚は誰がたべるのかね」ときたもんだ。

一瞬ドキリとしたが、すかさず大声で、

「ハイ！ 自分でありませう！」とやったら、大隊長は目を丸くしていたが、さすがは兵隊上りの太っ腹の大隊長、

「うん、腹だけはこわさないようにな」

と言うと、炊事場を一回りして歸つて行つたが、冷や汗がどつと出た。こりや参つた。

この頃、各中隊から召集解除者が大勢出た。ほとんどが入隊前は炭坑の従事者であつた。二

中隊からも同年兵一人と、初年兵の時からお世話になつてい

る中田班長が召集解除になり、炊事場に挨拶に来たがさすがに嬉

しそうだった。

新婚間もなく召集されたそう

で、一日も早く奥さんに会いた

い気持ちがかかるような気がし

た。恋愛結婚だそうで、初年兵

の時に、幕舎で奥さんの写真を

見せてくれたことがあつたが、

きれいな奥さんだった。

「橋、おれは一足先に歸るが、

頑張つてくれ」

と言われて、思わず涙が出そうになつた。

初年兵の時から苦業を共にし、お世話になつた班長だ。別れは辛い、軍隊という組織の中では別れの日が必ず来るものだ。奥さんと二人でお幸せにと別れを惜しんだ。

引き続き四年兵の満期除隊があつた。ラッパの先輩の白尾上等兵も除隊になり、故郷へ歸つて行つた。

九月に各中隊の旺盛な意欲で軍道と陣地が完成し、中隊ごとに続々と気屯の兵舎に戻り始めた。大隊本部の炊事班も解散となり、私も中隊の幕舎へ歸ることになつた。

二中隊の一部は気屯へ歸つたが、私達は中村中隊長と残り、三角兵舎を建設してから歸ることになつた。毎日材料の運搬に

アゴを出したが、中隊長が率先して一緒になつて材料を担ぎ、

黙々として坂道を登り、部下と共に苦業を共にしようとする人

間、中村中隊長の真摯な姿に畏

敬の念がわいた。

(続く)

「連作」

古平まで

坂本 甚 衛

(八)

夢土よりぬ (2)

誰が名付けたか知らぬ「苔の洞門」なる名称に感じ入りつつ、私の思考は歩行と共に深くなつた。樽前山や恵庭岳といつた支笏湖外輪山が噴火した際、

夜も昼もなく降り注いだ火山灰が厚く積もり、集塊岩層に固まる以前、降った豪雨の一滴がやがて一筋の源流になり、急流と化してこの狭い割れ目を深くえぐり、支笏湖に押し出したのだらう。樽前火山系が幾度かの噴火を繰り返す度、果たして天地の創造神はいかなる鋳を使い、

小手先を弄してこの芸術作品を創り上げたのか、グラウンドキャニオンの極小なミニチュア版ともいえる、細い谷間の行き止まりまで辿り、ようやく私の写欲

は満ち足りた。

最後の地点を目差す車は、顔まで青く染まりそうな樹海の底を縫って樽前山七合目に到着した。いよいよ最終目的の樽前登山である。

私は——写真を撮るのが今日の最大目的だから、お前は綾たちと後からゆつくり来い。と妻に言い聞かせ一足早く前列の人垣に身を割り込ませた。

秋の連休に快晴とあつて、登山路は人が切れ目なく続く。大雪山国立公園の旭平なんかと違つて華麗な高山植物はない。緯度と高度の差だらう。せいぜい蝦夷ツツジぐらいしか目にできなかった。話に聞くイワブクロ、別名樽前草と呼ばれる花はもうとつくに終わりを告げ、茎だけの株が風にそよいでいた。娘が言っていたように軽石

だらけの路なので、ひどく歩きにくい。西側とも灌木が無くなり短い草だけになった。斜面横にそれ、次々に登つて来る男女や周囲の山を写す。

午後一時半、到達した山頂は一面の濃霧だった。あえぎながら登る一行の前に厚いガスが垂れ込め出した。霧は風に流れ下に原野が見え隠れするが、ちょっと晴れそうにない。山の天気

の激変ぶりを知らされた。遅い昼食になった。妻が広げた敷物の上に、二、三メートル下方の娘から、保温ジャーに入ってきた熱い味噌汁が届けられた。食事後、私は五里霧中の火口周辺を一巡してみた。

その時だった。ふと見た火口の描鉢型内部斜面の砂礫の上に、ぼうつと霞む長方形の瑪瑙を発見した。わが目を疑った。

これは夢か？ 思わず声にならない歓喜が洩れた。もしかしたら、緩んだ口元からよだれが垂れていたかも知れない。遥かなる邪馬台国の昔から宝石に準ずる価値を見え出され、翡翠と共に珍重されてきた石英質の銘石

がなんでこんな火山地帯に、しかも一個ぼつんとあるのか、動転して上の空の私はそこまで思い浮かばなかった。

当時は一時の銘石ブームがやや下火になったとはいえ、隠れた愛好者が世に多くいた。私もまた例外ではなかった。足下に気をつけ斜面を下り夢中に軍手で掴んだ。しつとりと濡れていた。霧のせいに違いはない。些か重量感に乏しいきもしたがたいして気にせず、底深い薄茶色の夢幻をじつくりと見た。今日の登山旅行に参加できて良かった。しみじみ考えた。リュックの口を開けて仕舞おうとして妻を呼んだ。

「おい、大変な物拾つたぞ。瑪瑙だ、見てみる」

「あれー、どこにあつたの？」話している私を見て娘も近づいて来た。妻が私のお株をとり言った。

「父さん、瑪瑙の石拾つたんだって」

「ほんと？ よくあつたこと、こんな所に」得々と鼻うごめかす私の周囲

俳句鑑賞

お楽しみコーナー

13

俳誌 悠 主宰 水 見 壽 男



まず冒頭にせたかむいへの出稿を数次にわたって休載いたしましたこと、まことに申し訳なくお詫び申し上げます。

手拔きの出来たサラリーマン時代とちがい、俳句は生命と同じく、手拔きの許されない文化文芸です。性質上どうしても完璧を求める余り意気が強く、更に悠の主宰として伝統俳句の道場主を自認している手前もあつて、つい欠礼をしてしまいました。ご寛恕を願います。

と申しまして、その主たる理由は、俳句結社誌悠の関連することはもとより、このところ俳句総合誌からの原稿以来の向きが多く、それをこなす才能の乏しさをつらつら骨身に感じている次第なのであります。俳句界への毎月の会員作品八句の出稿のほか、このところ俳句、俳壇、俳句四季、俳句朝日、そしてまた俳句四季と俳句作品やら文筆の依頼が多く、嬉しい悲鳴を上げているのが本当のところですよ。手拔きの出来ない性分なので、とことん付き合つてしまい、下調べやら史実の調べなど

手作業について追われてしまい、このようなことになってしまいました。

さてその多忙のさ中のこと、俳句界の辛口評論家斉藤審爾さんとお会いし、いろいろとお話しする機会を得ました。斉藤さんは目下、河田書房から古今東西の俳句三千句を選び、全七巻のアンソロジーを刊行中です。そのためここ数年来、斉藤さんは朝六時から夕六時まで、十二時間ぶつ通しで各誌から俳句を選び、三千句をまとめる作業をされたそうです。その結果として、こんな結論を得たというのです。

俳句作りの参考書として歳時記があります。この作業の中で斉藤さんは、数多く刊行されている歳時記の中の歳時記として、虚子編の『新歳時記』こそ誇れる歳時記として推薦しておられました。この歳時記こそ古今の名句を採録し、虚子の偉大さが生き生きと輝いていると強調されました。昭和九年刊行のこの歳時記は、今も座右に置いておりますが、私はこの歳時記で初学の頃懸命に学んだものでした。

⇒を、いつの間にか娘たちのグループ、若妻の一行が覗き込んでいた。すると中の一人が突然、素つ頓狂な声を上げた。

「あら、それ、わっちさつき捨てたお茶だわ」

一瞬、意味がのみ込めず私は戸惑った。静まり返った人垣から不意に大爆笑が噴き上がった。ついには私もつられて、腹の皮がよじれるまで笑い転げた。

間違えた要因は、その女性が昨夜飲料水が不足したら困ると、水筒の他に番茶をボリの四角い容器に入れ、冷凍庫に収納したためと知らされた。今朝、途中で解氷しないよう新聞紙に幾重にも包み、リュックに入れ持参した。結局、予想より喉の渇きが少なく水筒だけで足り、出番を失った番茶は半ば水のまま捨てられたというわけだった。よく確かめもせず有頂天になり過ぎた私は、得意の絶頂から奈落の底へ転落したピエロの心境だった。

短歌

吉平町岬短歌会

今年こそと植ゑし鉢の茄子咲き揃ふ花に無駄なしと人伝
てに開く

寺内 りょう

祭りの日社の中で聞く太鼓腹の底までズシリと響く

田中 香苗

見はるかす積丹の海は藍明るし水平線はくきやかにみゆ

堀 典子

けづりしに又も根づきて露草の空色の花小さく咲けり

東 美知

薫風に匂ひのりくる道沿ひに花満開のアカシヤ続く

丹後 初江

先輩の大きくはつきり書き上げし歌詞壁に有りて踊りの進む

鈴木 時子

真白な三角頭巾の助手さんがお茶配りくるる毎日ありがたう

この朝も看護婦さんがかけくるるやさしき言葉に心やすらぐ

竹内 コト

ひと冬を閉させし我が家なつかしも連翹が咲き雀らが来る

擁ぎたてよ初ものの苺食べましようと思ひ来し友は汗を

拭きつつ

池田 テル



吉平俳句会

禅門の泊月の碑よ花は葉に 齊藤波留

手造りの餌場に小鳥賑はへり 山口悦子

崖の燕巢仰ぐ女郎子岩 越野敏雄

我れ八十路櫻の色に染りたし 大和田絵伊

滝音の迫り来し山麓かな 福井幸平

滴りの奥にひそみしセタカムイ 高橋重子

雪溪を抱く積丹岳凜と 仲谷比呂古

雪溪の流れの果ては日本海 室谷弘子

潮の香を乗せ来る風の沢清水 泉 清三

十勝野の刈取進む麦の秋 外山俊久

万緑や萌へて山ごと海に果つ 渡辺嘉之

さくらんぼ薄紅ゆるる光摘む 堀 典子

郭公の声風を抜け森を抜け 越野清治

古平町史年表

- ▲ 満州事変に出征していた兵士が凱旋し、小学校運動場で歓迎会が開かれる
- ▲ 禅源寺本堂前の石段が取り壊され、坂道に改修される
- ▲ 産業振興会後志更正共進会で4人が受賞する
- ▲ 北海道庁長官夫人、支庁長夫人らを招いて愛国婦人会古平委員区総会が、約600人が出席して開かれる
- ▲ 船入瀬建設工事にともなう防波堤・砂防堤・荷揚場の埋め立て工事が完成する
- ▲ 浜町丹岬時報社(社長・女鹿雄太郎)から、『丹岬時報』が発刊される
- ▲ 役場が主催し、家庭衛生講習会が開かれる(当時は衛生という言葉が新しい言葉であった)
- ▲ 種田商事合資会社が設立され、水産加工・海陸運輸事業を行い、自動車会社は自動車部となる
- ▲ 船入瀬築設竣工式・祝賀会が行われ、児童も参加して旗行列が行われる
- ▲ 井上病院が横浜へ引越し、後に平田薬局が開業する
- ▲ 積丹半島産業振興協議会が設立される
- ▲ コンブ礁造成の投石中に、作業員が石に当たり事故死する
- ▲ 北海道金満家大番付で、山口金治が番付の前頭に載る
- ▲ 宣伝のため飛行機が飛来しビラを撒いたが、強風のためビラは海に落ちた。飛行機の飛来に町民は大騒ぎをする
- ▲ 願雄寺薬師堂が落成し、落慶式に稚児行列が行われる
- ▲ 皇太子殿下がご生誕し、その命名式を祝い青年団や児童らが旗行列を行う
- ▲ 北後志沿岸すけそ延縄業者と底曳網業者が、操業区域についての協議をする
- ▲ 町の塵芥処理場として、土場大川付近が指定される
- ▲ 古平町で納税奨励交付金制度を設ける
- ▲ 古平尋常高等小学校開校60周年事業に、同校教員が『古平町郷土誌』を刊行する
- ▲ タモギタイ道路2400メートルの改修工事が完成する
- ▲ 浜町1条・2条・3条通り道路の改修と、コンクリートの側溝を新設する

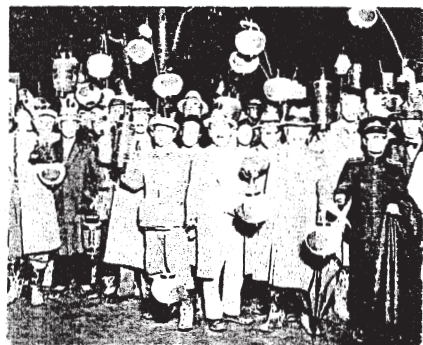
→ 念願の船入瀬完成
記念写真集「古平町鯨漁十態」とパンフレット「港ふるひ羅」記念スタンプ ↓



港ふるひ羅



↑ 喜びの開校60周年記念
ラッパ鼓隊を先頭に旗行列



↑ 町民挙げて祝うちょうちん行列